

中等教育研究開発室年報 第33号（2020年3月31日発行）別冊電子版  
2019年度 授業実践事例

芸術科（美術） 高等学校第I学年

異文化理解を深める自画像の鑑賞

授業者 森長 俊六

（教育研究大会 公開授業）

広島大学附属中・高等学校



## 高等学校 芸術科(美術) 学習指導案

指導者 森長 俊六

日時	令和元年 11 月 29 日(金) 10:35～12:05(90 分)
場所	美術教室
学年・組	高等学校 I 年 選択ア組 31 人 (男子 17 人 女子 14 人)
題材	異文化理解を深める自画像
目標	1.意図に応じた技法を選択してメタ認知的な視点で自己を創造的に表すことができる。(知識及び技能) 2.構図や配色, 背景など画面全体を考えて自己を表現し, 表現された他者の意図を汲み取ることができる。(思考力, 判断力, 表現力等) 3.他国の文化や同年代の作品に主体的に関わり, 自国の文化や自身の内面に目を向け, 他者との相互理解を図ろうとする。(学びに向かう力, 人間性等)

### 指導計画 (全 18 時間)

第一次	自画像制作	14 時間
第二次	作品の発表と鑑賞	2 時間
第三次	シカゴ大学実験学校中学 2 年生の自画像鑑賞	2 時間 (本時)

### 授業について

美術科では昨年度から米国シカゴ大学実験学校(University of Chicago Laboratory Schools)と交流を行っている。現地とは 13 時間もの時差があるためテレビ会議での交流は難しく、現在のところ、同じ課題に向き合って制作した作品をビデオレターにして紹介し合ったり、実験学校の芸術祭で本校の生徒作品を展示したりする方法で交流を進めている。

本授業では、送られてきた 18 人分の自画像紹介ビデオをグループで鑑賞し、鑑賞した内容を発表してクラスで共有する。鑑賞を深めるための工夫は次の 3 点である

1. 1 台の iPad に 2 人分のビデオレターを入れ、4 人のグループで 1 台 (2 人分) を鑑賞する。
  - ・ 1 人で鑑賞するより複数の方が鑑賞が深まるであろう。
  - ・ 同じグループで 2 人分を鑑賞すると比較することで鑑賞が深まるであろう。
2. ビデオを再生する前の静止画の段階で作品鑑賞を行い、再生後にも鑑賞を行う。
  - ・ 静止画段階の解釈や仮説と視聴後の作品の受け止め方の違いを実感・検証できるであろう。
3. グループで鑑賞した内容を全体場で発表し合う。
  - ・ 他グループの自画像について、解説や解釈を聞くことにより鑑賞体験が広がるであろう。

### 本時の目標

1. 作者の思いを読み解き、表現意図を理解することができる。(思考力, 判断力, 表現力等)
2. 他国の同年代の作品に主体的に関わり、他国の文化や他者の心情、表現を理解する。(学びに向かう力, 人間性等)

### 本時の評価規準 (観点/方法)

1. 作者の思いを読み解き、表現意図を理解することができる。(思考, 判断, 表現/生徒観察, ワークシート)
2. 他国の同年代の作品に主体的に関わり、他国の文化や他者の心情、表現が理解できる。(主体的に学習に取り組む態度/生徒観察, ワークシート)

## 本時の学習指導過程

学習内容	学習活動	指導上の留意点
授業概要の理解	○授業の概要と流れを知る。 「届いた VTR を見てコメントする。」 ① 4 人ずつのグループになり、グループごとに iPad に入っている 2 名の VTR を見る。 ② 2 名の作品を鑑賞しコメントを考える。 ③ 全体で VTR を見て、担当したグループは作品を紹介するとともに考えたコメントを発表する。	・シカゴ生徒 18 人分の VTR は 9 台の iPad に 2 名ずつ分けて入れておく。
グループでの鑑賞 (意見・考えの交流)	○4 人グループで 2 名分の自画像を鑑賞する。 <b>VTR スタート前</b> ・何が描かれているか ・使われている色や構図の意図は ・全体から受けた印象 ・思い浮かべる作者像 ・何を伝えようとしているか ・どういうところを工夫しているか ・文化的な違いで気づいたこと など <b>VTR スタート後</b> ・説明を聞いて分かったこと ・説明を聞いて納得(共感)したこと ・作者の 1 番伝えたいこと など それらを踏まえてコメントを書く。 「この絵の 1 番いいところ、すごいところは〇〇だ！なぜなら・・・」	・自分たちの描いた自画像や作品紹介のビデオレターを見て制作したものであることを意識させる。  ・最初は VTR をスタートする前に鑑賞する。(ピンチアウト等) ・次に VTR をスタートして鑑賞する。 ・作品紹介文も参考にする。
全体での鑑賞	○全員で VTR を見て、担当したグループは作品解説や交流相手に対するコメントを発表する。	・コメントは日本語で可
まとめ		・任意の VTR を映し、担当グループは鑑賞した内容やコメントを発表する。  ・次回はコメントを英訳する。
<b>準備物</b> 生徒：電子辞書、筆記用具 教師：iPad, ワークシート, 作品紹介文, 電子黒板, 書画カメラ, 大型TV		

# 自画像－国際交流授業（アイデンティティーの表出）

名前

## 解説スタート前の鑑賞のポイント

- ・何が描かれているか
- ・使われている色や構図の意図は
- ・全体から受けた印象
- ・思い浮かべる作者像
- ・何を伝えようとしているか
- ・どういう所を工夫しているか
- ・文化的な違いで気づいたこと  
など

## 解説スタート後の鑑賞のポイント

- ・説明を聞いてわかったこと
- ・説明を聞いて納得(共感)したこと
- ・作者の一番伝えたかったこと  
など

## それらをふまえて

1. 作者の説明を要約し作品を解説する。
2. 感じたこと思ったこと伝えたいことを書く。  
「この絵の1番いいところ、凄いいところは○○だ！なぜなら・・・」など

No.		Name	
-----	--	------	--

<p>-----</p> <p>-----</p> <p>-----</p> <p>-----</p> <p>-----</p> <p>-----</p> <p>-----</p> <p>-----</p> <p>-----</p> <p>-----</p> <p>-----</p> <p>-----</p> <p>-----</p> <p>-----</p> <p>-----</p> <p>-----</p> <p>-----</p> <p>-----</p> <p>-----</p> <p>-----</p> <p>-----</p> <p>-----</p>
---

## 実践上の留意点

### 1. 授業説明

本授業は実験学校生徒の作品紹介ビデオを視聴しつつ自画像作品を鑑賞するものである。授業の工夫点は次の通り。

- ① 4人グループで2人分のビデオレターを鑑賞させることにした。コメントに幅が出るであろうし、比較鑑賞も行える。
- ② いきなり VTR をスタートせず、まず静止画の段階で鑑賞する。作者の説明を聞く前に作品のみで鑑賞する機会を持つ。
- ③ 全体発表の機会を設け、他グループの作品や解釈を聴き鑑賞体験を広げる。発表の時、作品紹介ビデオは大型テレビと電子黒板に同時上映する。電子黒板の方はプロジェクターを操作して作品を拡大表示する。



昨年と同様の試みであったが、昨年に比べると送られてきたビデオの解像度が低く、また、昨年は iPad を使用したが、今回は校内の調整により iPad mini を使用することになったため画面が小さかった。よって、作品の細部を明瞭に観察することができなかったことが惜しまれた。

### 2. 研究協議より

- ・ 自画像は写実的な表現にとらわれることなく多様な表現を認め促すよう指導しても肌の色を肌色にするなど固定概念を解き放つことはハードルが高い。どのようにすれば良いか。→多様な表現が掲載されている教科書を見せたが、実験学校の生徒のようにはいかなかった。肌の色に関して、昨年はもっと多彩であった。周りの生徒の影響もあるように思う。周りが奇抜・大胆であれば自分も踏み込めるが、周りの作品が肌色ばかりであれば勇気がいる。また、小・中学校段階から「肌色で描くべきもの」というのがあるのかもしれない。
- ・ 発表の際、「彼女は黄色い唇に最もこだわって描いた。彼女は最も大切にしていると言っていました。」で終わっていたが、なぜそうしたか、どういう思いがあってそうしたか。と問うていくのが美術の言語活動である。それが造形的な見方考え方を広げたり深めたりする事につながっていく。
- ・ 動画スタート前の鑑賞タイムがあったが、示している視点を基にまずは個人が向き合う時間があれば良かった。見方考え方は、まず自己との対話をすべき。
- ・ 去年の説明文はタイプ打ちだったが、今年は手書きのままなので個性が感じられるとこ

ろが良かった。読めないところは絵を見て、又、説明文を行ったり来たりしながら、絵を見るだけでは分からない部分を話し合う場面もありプラス面があったように感じる。

・説明文を翻訳・解釈・理解することに時間が費やされていたが、もっと作品に対面し味わうことに力を入れるべき。正解を求めるのではなく、自分はこう捉えたよと伝えるだけでもありではないでしょうか。

・これからはグローバル化対応を各教科で具体的にどのように進めるかが課題である。これまでも国際交流は色々行われてきているが、効果的な学習方法について評価も含めて示していく必要がある。美術教育は人格形成ということを考えれば、学習効果として教科のスケルトンを明確にしつつ、グローバル市民としてのアイデンティティへの気づき、意識を高めていくことが重要である。自分とは異なる文化が自画像に見えて自分自身が感じ取れる力が育まれてくる授業であった。色や形を超えた精神面を感じ取れる子どもたち、そういう視点で今後も授業を考えていっていただきたい。

